

がんになる人、ならない人の違い

文 濱元 誠栄

text by Seiei Hanamoto

タバコを吸って、酒も浴びるほど飲んでいるのに、病気とは無縁の方もいれば、酒もタバコもやらずに、健康に気を遣っていたのがんになる方もいます。人それぞれといってしまえばそれまでですが、どうしてこんな差が出てくるのでしょうか。

現代人は日々、がんの脅威にさらされています。がんは、簡単にいうと、人体の設計図である遺伝子の異常によって、異常な細胞が作られ、それが大きな腫瘍になるほど増殖した状態です。加齢やストレス、タバコや食品添加物など様々な要因で私たちの遺伝子は毎日ひとつの細胞あたり最大50万回も傷ついているといわれています。

誰でもがんに関わる遺伝子を持っており、アクセル役の「がん化を進める遺伝子」、ブレーキ役の「がん化を抑制する遺伝子」の2種類があります。その両方が傷つくと、細胞ががん化し始めます。健康な生活をしている人でも、運悪く両方に傷がつけば、がん細胞が

生まれます。高齢者や不健康な生活をしている人だと、遺伝子に傷がつく頻度が高くなるので、よりがんになりやすくなります。

女優のアンジェリーナ・ジョリーさんが、乳がんの予防のために乳房を切除して話題になりました。彼女は、乳がんを抑制する遺伝子に、生まれつき異常があり、乳がんになる可能性が普通の人よりも何十倍も高かったからです。

このように私たちの体では毎日5000個ものがん細胞が生まれています。それでもがんにならないのは、免疫細胞ががん細胞を全て排除しているからです。この免疫の力が強いうちはよいのですが、加齢やストレスなどで免疫の力が弱まると、がん細胞を排除しきれなくなり、どんどん増殖してしまいます。がんの予防に重要なのはこの免疫の状態なのです。

簡単にまとめると、がんになりやす

い人は、がんに関係する遺伝子に傷がつきやすい人、免疫が弱っている人です。但し、健康な人でも生まれつき遺伝子に傷を持っている人や、加齢やストレスなどで免疫が弱っている人は、がんになる確率が高くなります。

当院ではがん関連遺伝子を調べる血液検査を行っており、遺伝子の異常を調べることで、画像診断よりも早い段階でがんのリスクを知ることが出来、超早期発見や予防に役立ちます。

Profile

沖縄県宮古島出身。2001年、鹿児島大学医学部卒業後、沖縄県立中部病院、杏林大学医学部、茨城県地域がんセンター、沖縄県立宮古病院、宮古島徳洲会病院を経て、がん治療・再生医療の道へ。2018年、銀座みやこクリニックを開業し、がん患者へのセカンド・オピニオン、遺伝子治療や免疫治療を行っている。日本外科学会専門医、日本形成外科学会、日本癌治療学会、日本再生医療学会認定医、日本禁煙学会指導医。著書に「がんよろず相談室 [20のエピソード]」。
<https://gmcl.jp>

